

新潟県瓢湖で越冬するオナガガモの性比とその変化（2003/2004）

本間隆平¹・千葉 晃²

（¹新潟県野鳥愛護会・²日本歯科大学）

【目的】一般に、鳥類の性比は遺伝的に決定され、理論上、雄：雌 = 1 : 1 であるが、発生初期の死亡率に性差が生じるため孵化段階で性比が偏ったり、孵化後の生存率や空間的・時間的分布の性差によって性比が偏ることも知られている。ガンカモ類における性比の偏りには、（1）繁殖期における被捕食率の性差、（2）狩猟圧に関連した死亡率の性差、（3）越冬地における分布域の性差、（4）渡りの時期に関する性差などが深く関与しているものとみられる。オナガガモでは、長年にわたるモニタリング（標識調査）により、雄比率の減少傾向が認められる生息地の例（宮内庁埼玉カモ場；杉森他、2000）も報告され、地球規模での環境汚染を視野に入れた分析が必要であるとの指摘もなされている。1998 年以来、私達は許可を得て瓢湖でカモ類の標識調査を開始し、給餌による誘引と罟（網）を組み合わせる主にオナガガモを標識・放鳥し、調査の一端を担ってきた。その過程で、本種の性比が雌に偏っていることに気づいた。そこで、本種がハクチョウへの給餌を利用して越冬している事も考慮に入れ、写真による計数法と捕獲法を併用して性比を求め、越冬期を通じた変化を追跡してみた。

【調査地と方法】調査はハクチョウの渡来地（天然記念物）として有名な新潟県阿賀市（旧水原町）瓢湖でおこなった。管理事務所の一画に手製の網を設置し、早朝より餌を撒きながら誘引・捕獲し、雌雄別に標識を付し、計数の上放鳥した（捕獲法）。また、給餌施設周辺に集結する本種を高所より写真撮影し、画面内の雌雄を計数した（計数法）。

【結果】今回は、両調査法が実行できた 2003/2004 年冬季の結果を中心に報告する。捕獲法で得た結果を 10 月下旬から 3 月中旬まで、各月を 3 期（上～下旬）に別けて追跡した結果、捕獲数（雌雄合計）/ 旬の値は 11 羽（3 月下旬）～ 458 羽（1 月下旬）と大きな変化がみられ、野外での採餌に困難が伴うと予想される厳冬期に捕獲される個体が増加する傾向が認められた。この方法で得た性比は雄比率が 6.2%～63.6%、雌比率が 36.4%～93.8% の範囲で変化し、渡来当初から 1 月下旬まで雌の高い値（73.4%～93.8%）が続いた。一方、雌と対照的に低い水準を示していた雄比率は 1 月下旬から上昇に転じ、移動末期に当る 3 月には 53.9%～63.6% に達し、雌の値と逆転した。一方、計数法で得た結果をみると、雄比率は 21.9%～54.1%、雌比率は 45.9%～78.1% の間で変化し、越冬期間を通じた雌雄の変化パターン（曲線）は緩やかなものの、捕獲法で得た変化に類似していた。

